

# わたしの人生分岐点 その2 予科練から海軍へ

koberyo1

日本海軍の戦争の状況や、あとで知ったことだが、昭和20年3月10日には東京が焦土となったことなど悪い状況は一切知らないまま、わたしは同じ年の4月10日に予科練習生、すなわち海軍の予科練の課程をすべて終了した。久里浜通信学校第一14期生だったわたしは卒業し、少年の身でありながら職業軍人となったのだ。

さっそく、卒業した予科練の二十名は、横須賀から千葉の館山飛行場にむかって移動した。横須賀から小型船に乗る。海は荒れに荒れた。しかも予定時間に到着できず、全員、船酔いでふらふらになっていた。そして着いてすぐ待っていたのは到着直後のご挨拶の「しつけ教育」の暴力的な一撃である。被っている制帽が曲がっている、ただそれだけの理由で鉄管で一発ずつ殴られた。だが、悪いことばかりではない。

お祝いと称してでてきたのは、大きなヤカンとスルメだった。ヤカンの中身は日本酒で、湯呑みで乾杯した。館山では二日ほど、ゆっくりとした時間がもてたかと思う。飛行場の裏山を登ってみたりもした。満開のツツジをみて、久方ぶりに娑婆の、この世の俗人の世の中のぬくもりを感じた。楽しいと思った。

千葉の館山から博田飛行場までは約一時間の航程だ。十七歳の少年たちにとっては、これは貴重な体験だった。なぜなら、飛行艇に乗ったからだ。珍しい体験であったし、うれしくもあった。離陸ならぬ離水し、空に舞い上がってからはプロペラ音がうるさく、搭乗者同士の会話ができない有様だった。

窓から下を見ると、波打ち際がある。茶色の大地が迫ってきたと思うと、やはりそれは飛行艇であるから、ぐんぐんと海が近づいてきて、どどどーん、という衝撃音とともに大きくゆれたと思ったら、すでに飛行艇は着水していた。しばらく、波にゆられていた。爆音が消え、急に静かになった。ちょうど船の中にいる、そんな感じであった。小さな船に牽引され、飛行艇は陸上に引っ張り上げられた。艇から降りると目前に大きな倉庫が二棟あったことを覚えている。

飛行場の宿泊所は、ずいぶん暗くて粗末な建物だった。二日ほどそこに雑魚寝し、それからこの地にやってきた二十名の同期はそれぞれ所属先に散っていった。わたしとN、それからMの三名は〇〇〇部隊に配属された。

博多から電車に乗り、約三十分くらいのところに「今宿」というところがあった。博多湾に面したじつに風光明媚なところで、そこに本部がもうけられていたのである。今宿町役場の一階は受信所、二階は宿泊所に使うという。いわば、ここに通信施設がもうけられ、わたしはそこに配属されたというわけである。

この地は博多湾に面していて、〇〇〇部隊は日本海に侵入するアメリカの潜水艦阻止や警戒を強化するため、「今宿地区」にテントを張って駐屯した。搭乗員はもちろん、整備員などの関係

者はここに宿泊することになった。人員は約100名である。100名といえば大所帯である。非常にニギニギしく、博多の市街地に近い。黒松が延々とつづく浜辺は、それはそれは美しいところだった。

また、ここは歴史的にも有名な浜辺であった。土地の人は、「元寇の浜辺」といった。その昔、博多の海岸に蒙古の大軍が上陸した時、その夜に「神風」が吹いて、蒙古の軍艦はほぼ全軍が沈没したという。

当時の鎌倉幕府は再度の来襲にそなえ、九州の諸藩に命じて箱崎から今津までの約20キロに石を積み、防塁を築いたというが、わたしがみた防塁は崩れ落ち、その形はすでになかった。海から吹きつける風は黒松に寂しい音を聞くだけで、石の防塁は崩れていた。

さて、本部の話をする事にしよう。

そこでわたしたちは暗号文傍受などの通信業務を行い、わたしは通信兵であった。新入りのわたしは天気予報をキャッチしていた。交信は先輩上司の担当だった。すなわち、わたしは天気予報だけを専門に傍受していたのである。

天気予報の傍受と聞けばかんたんそうだが、それでも天候が不順な場合、ビートの底をつかむとき、周波数がずれていて電波をつかまえられず、戸惑うこともあった。このことにより、未熟な要領の悪い自分を知った。

受信機は二台あって、交信用と受信専用だった。当直は昼間はよいが、夜中を担当する場合、眠い眼をこすりながらも受信機の前に緊張しながらすわり、耳を100%使うようにした集中力がないと電波をつかまえられない。当直は真剣勝負である。二階の連中は階級を越えて仲良しだった。東京芝浦電機のいつも威張っている技術一等兵は、わたしは嫌いだった。したがってM銀行からやってきたH一等兵に階級の上下に関係なく、わたしは何かにつけ相談をした。予科練をでたわたしの方が、社会人をしていて赤紙で徴兵された彼よりも階級が上だったのである。

この一等兵は暗号の翻訳係りであった。二、三冊の暗号書をたよりに辞書を引くようにして文章を正しく仕上げてゆくのがだった。そして電報をただしく受信するよう、わたしたちに要望していた。わたしの方が階級は上なので組織上は上司なのだが、これではどちらが上司なのか、わからないと思った。やはり文筆能力の差がそこに大きくあらわれていた。自分はやる気というか、向上心は人より強かったが、何かが違うものを感じた。

年齢、それとも経験だろうか。何か品位がある人に対して、人前で上級職だと威張ったところで何にもならない。天地神明に誓って、また良心に照らして「ただしい」ことの前には素直に頭を下げなければ、と思った。

今宿本部」から出たところは、畑がつづいていて土地の人たちがつくる農作物をみた。サヤエンドウが作られていて、いかにも春らしい。このサヤエンドウの味噌汁を食べたいと思った。

時々、H一等兵と気分転換にサヤエンドウの「つる畑」をみにいった。一等兵はすでに四十歳を超えていた。働き盛りで「人生論」を自己主張するような真摯で、ひたむきな人だった。自分流の人生をどう歩むのかを問いつづけ、自己実現に挑戦した人こそが、人生の成功者だ、と彼はいった。

これは、いくらでも自己啓発の本が手に入る現在の話ではない。戦時中の話である。しかし、その時のわたしは自己実現とは何なのか、理解できなかった。そして銀行マンだった彼はいった。「商業でいきるのであれば、簿記を勉強しまければ」

思えば、この一言によってわたしの人生の方向が変化してゆくことになる。